

かけがえのない教育遺産―

書評 『八木三男教育論集 新潟から』

日本の教育をみる』のメッセージ

三輪定宣

畏友・八木三男先生が旅立たれてやがて一年半がたとうとしている。本書は「あとがき」(こ令嬢八木絹さんの筆)のとおり、そのご遺志に基づく刊行であり、生前に自選された40年来の論文集(全51編584頁)である。その動機は、「『市民立教育研究所の理念と展開』というテーマがいかにもすてがたく、編集してみることにした」とのこと、本書のサブタイトルにもなっている。

それは、一見、所長として尽力された研究所の活動とビジョンの解説のようであるが、全体を通覧すると、教育における「市民」原理とも言うべき視点が通底し、教育研究所、教育(教育学)研究にとどまらず、学校教育とそれを担う教育専門家である教師(教職員)の

あり方への根本的問いかけであり、教職生活を含め生涯を通して熟成された八木教育論の核心と読み取ることができる。

例えば、収録されている最新(2007年)の論文『自己分析』と『ありのまま』―校長のアンケート調査から考えたこと(381―389頁)は、「『自己充足的な』観点ではなく、『自己分析的』の再確認」の立場から、身内＝教師への厳しい批判が展開される。

そこでは、「教員社会の『負』の現状もよく分析すべきだ」「学校をありのままに見つめなおすこと」との観点から、「市民社会的な成熟に対応した、思想性の高い、哲学的にも、人間学的にも質のよい」「新しい学校論」の必要が提起される。―戦後、「国の政策

に対抗するための運動や理論はあったが、自己分析的に、国民と共同して教育を創造していく力が格別に弱かったのではないか」「内容・形式・広報などはいち切つて大衆的なものにしていく必要がある」「組合運動の再構築のために、さらに運動方針全体を市民的な検証を受けられるようにしていく」「もつと幅広い専門性を身につけた『教育を司る』教育実務家・教員が：カギをにぎるだろう」等々。八木教育論を集約したかのような率直な論述である。

それまでの研究所での活動や「にいがたの教育情報」などの論考（第一・二部収録）も、当初から、「小出町干溝小学校の統廃合反対闘争を通じて、地域住民がいかに地域の文化、交流の中心として学校を大切にしているかを学んだ」（34頁）とあるように、「地域」や「住民」との共同を重視し、「新潟」という地域の教育と向き合い、「新潟」という地域から日本の教育、とくに教育政策を検証し、その克服をめざす論調は一貫している。

それ以前の教職在職中、主に1970年代に執筆された「第三部 高校教育と高校教育運動」の論考でも、同様であり、「学校の教育方針・教育状況も地域に公開され、地域によって検証されること」（493頁）

など、民主的学校づくりと地域との連携、生徒・父母・住民の参加などの視点を踏まえ、行政の施策や組合の運動方針が検討されている。

「第四部 新潟県知事選挙と研究所の立場」の諸論考は、教育と市民、自治体、地域などの関係の問題が、「選对本部と政策立案の責任者を兼ねた」（18頁）知事選挙の経験を通して、政治や大衆運動レベルで総合的に考察され、八木教育論の進化のエポックを刻んでいる。例えば、革新的政治勢力を囲む、「一人ひとりが強制されない自由な独立した個人として市民運動に参加する市民」の形成、「市民的社会的成熟をどれだけ深化させるかという問題」（574～575頁）などへの注目である。

八木三男教育論集の基底を貫く市民的教育共同論は、「人間は本質において共同社会性をそなえ……人類は系統発生的に受け継いできた」（296頁）など、マルクス主義人間学に基づく人類史的規模の考察を含め、深い教養・学識に裏付けられている。一人の教育者・教育研究者の真摯な実践と思考の軌跡、所産である本書は、教育を担う人々の知恵と勇気の源泉、かけがえのない教育遺産として明日に生きつづけるにちがいない。

（みわ さだのぶ・千葉大学名誉教授）